

テ子ヲ産タル鸕ヲ取テ、雄鸕ヲ殺シテ、雌鸕ニハ頸ニ赤キ糸ヲ付テ放ツ然テ明ル年ノ春鸕ヲ待ツニ、其ノ雌鸕他ノ雄鸕ヲ不具ズシテ、頸ニ糸ハ付乍ラ來レリ、巣ヲ昨テ子ヲ産ム事无クシテ飛去ヌ、父母此レヲ見テ實ニ然ル事也ケリト云テ、娘ニ夫合セムノ心无クテ止ニケリ、然テ娘此ナム云ケル、

カゾイロハアハレトミラムツバメソラフタリハ人ニチギラヌモノヲ、トゾ云ケル此レヲ思フニ昔ノ女ノ心ハ此ナム有ケル、近來ノ女ノ心ニハ不似ザリケルニコソ、鸕メモ亦他ノ雄无ケレバ子ハ不產子ドモ、家ニ來リケムコソ哀ナレトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔牛馬問二〕予白蛾○新井が類縁に、宇松貞といへる醫あり、一とせ夏鍼をならべ置たるに、鐵鍼を紛失せり、尋れども終に不得して止ぬ翌年の夏のはじめ徒然して座し居たるに、縁の上へ血立た、り落、不思議に詠め見る所に、大なる蛇落て死にける、此由を審にするに、燕來て年々此家に巣を作るといへども、此蛇のために卵をとられ生育する事なかりしに、去年の鍼を巣に貯、今年終に敵をとりぬ、物おのづから此理有是予親しく聞所なり、

〔隨意錄三〕嘗聞焉、大阪道頓堀鍋屋道味者宅、有雙燕來巢三年、生雛四、一朝雄夙起巢、宅未開戶、乃頽頽宅中、猫捕食之、雌乃獨能養雛、後有一雄燕來、欲棲其巢、寡雌拒之不容、雄猶欲來棲、可二十日、而雌遂許之、相與哺雛、一朝雌不處、時雄含蒺藜哺雛、而殺其二、爾後雌頻搏追其雄、又不復適焉、獨育二雛、元元貞二年、雙燕巢于柳湯佐者宅、一夕家人舉燈照蠍、其雄驚墜、猫食之、雌悲鳴不已、朝夕守巢、哺諸雛、成翼而去、明年雌獨來復巢其處、自是春來秋去、獨六稔、目爲貞燕、云禽獸之性、彼此有相同者、如斯之類、不一而措、

〔本朝食鑑五禽〕燕○中

肉氣味、甘平有毒、本草言酸、然未覺、主治、殺蟲利水腫、疊脹、療痔漏、